

## 創造性の発達に影響を与える要因は何？

創造性の発達にはさまざまな要因が影響を与えます。子どもの内的な要因である「好奇心」や「熱中性」、「長時間にわたる持続性」もそれらの要因に含まれます。しかし、すべての子どもが持っている創造性をいかに伸ばすかについて考察しようとする際には、内的な要因は取り扱うことは困難です。家庭や教育、環境といった外的要因について考えるしかないのです。

### 1. モデルの存在

様々な分野において国際的に活躍する才能豊かな人が、親や教師等からどのような影響を受けたかに関する調査があります。Bloom & Sosniak (1981) は、国際的に活躍している多くの人について長期間に亘るインタビューを試みました。同様に両親や教師についてのインタビューも行っています。そしてそれらの才能豊かな人たちが少年時代において、それぞれの専門分野の達成のモデルになる人（しばしばそれは両親のいずれか）に出会っているという確固たる証拠を得ました。加えて、それらの才能豊かな人たちは、達成のモデルを探し、興味ある専門領域において顕著な達成をした人々について書かれた本も熱心に読んでいます。別の研究では、両親の能力や性格的な特性が子どもの創造性の高低と中程度に関連するという結果を得ています (Domino, 1969)。つまり、自分が目標とする存在＝モデルがいることによって、その人の創造性の発達は影響を受けているといえるでしょう。

### 2. 教師の価値観

教室において子どもの創造性が伸びるためには、教師が創造性こそは教室で伸ばす必要のある重要な能力であるとする価値観を持っている必要があります。教師の価値観と子どもの創造性の関係を直接扱った研究はほとんど見られませんが、創造性の基盤にある子どもの「チャレンジ精神」「好奇心」「独立への欲求」と「子どもの自立が大切であるとする教師の信念」との間に強い相関を見いだした研究があります (Deci, Nezlek, & Sheinman, in press)。さらにこの研究では、教師が仕事に対して内発的に動機づけられていると判断した子どもは、自分たち自身をより有能で内発的に動機づけられていると知覚していました。

### 3. オープン教室と伝統的教室

どこからオープン教室でありどこから伝統的な教室であるかを峻別することはむずかしいことです。通常は、可変できる教室、活動および教科等の生徒の選択の幅、学習教材の豊富さ、カリキュラム領域の統合度、小人数・小集団授業が行われているか等の指標によって、伝統的教室とオープン教室を分けています。伝統的教室とオープン教室では、いずれが創造性の発達にとって有利なのでしょう。Horowitz(1979)は 200 あまりの研究を調査・整理して、伝統的教室が創造性の育成に有利であるとする研究は見当たらないと結論しています (表 2 参照)。12 の研究 (36%) はオープン教室の子どもが伝統的教室の子どもに比べてより創造的であり、10 の研究(30%)は混合した結果を示し、11 の研究(33%)では両者に差がありませんでした。表 2 を見ると、基礎学力に関してはオープンスクールと伝統的教室に差がありませんが、自己概念、学校への態度、独立対同調、好奇心、不安対適応、協力のいずれにおいても、オープンスクールの方がはるかに勝っていることがわかります。

表2 オープンスクールの総合的な評価 (Horowitz, 1979)

(調査数)	結果(%)			
	オープンの方がよい	伝統的の方がよい	混在した結果	統計的に差がない
基礎学力(102)	14	12	28	46
自己信念(61)	25	3	25	47
学校への態度(57)	40	4	25	32
創造性(33)	36	0	30	33
独立対同調(23)	78	4	9	9
好奇心(14)	43	0	36	21
不安対適応(39)	26	13	31	31
協力(9)	67	0	11	22

また Haddon & Lytton(1968)は 200 人のイギリスの子どもたちの創造性を比較しました。半分の子どもはフォーマル小学校(公立小学校)出身であり、残り半分はインフォーマル小学校(私立小学校)の出身でした。インフォーマル小学校では、比較的自由的な教育が行われています。二つのグループは言語推理的成績と社会経済的地位が等しくなるように作られていました。様々な創造性テストを用いて、この二つのグループを比較した結果、インフォーマル小学校の出身者が一貫して得点が高い結果となりました。

これらの二つの研究は、創造性を伸ばすには創造的な教育環境が大切なことを示しています。つまり、より自由に活動できる教育環境の方が、創造性を伸ばすことに適しているといえるでしょう。